様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２５２４
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３１７０

研究課題名（和文）日本近世領主制の特質に関する研究―交代寄合を素材として―

研究課題名（英文）A study on the structure of Lord System in early modern Japan : Focus on Koutaiyoriai

研究代表者
野本　禎司（Nomoto, Teiji）

開智国際大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０８４６４６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、交代寄合という近世領主を対象に、領主側・知行側の双方の史料を活用して、近世日本の統治体制の固有性（近世領主制の特質）を追究した。研究基盤となる史料調査では、交代寄合溝口家、本堂家、芦野家の家臣、在地代官、村役人層の文書群について実施した。その成果にもとづき論文その他の研究成果を発表し、とくに家臣の存在形態から交代寄合の特質を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、近世国家・社会において大名とも旗本とも位置づけられていない交代寄合の存立構造について、領主側・知行側の双方の史料を調査・分析することで、とくに家臣団のあり方に着目してその特質を解明した。旗本と交代寄合の家臣の再生産は、支配拠点となる居所の違いから、その流動性や供給元の差違が明らかになった。交代寄合を多角的に解明することは武家領主概念を再検討する上で学術的な意義を有する。
　また、本研究解題のための調査・研究を通じて調査地域の博物館等と史料保全・公開に寄与できたことも大きな成果である。

研究成果の概要（英文）：　This study investigates the unique nature of the early modern Japanese ruling system (the characteristics of the early modern lord system) for Kotai Yoriai by utilizing historical documents from both the lord and fief sides. The research was based on the documents of the Kotai Yoriai, Mizoguchi, Hondo, and Ashino families, as well as the vassals, local magistrates, and village officers for their families. Based on the results of this research, we published papers and other research results, and clarified the characteristics of the Kotai Yoriai, especially from the perspective of the existence of the vassals.

研究分野：日本近世史

キーワード：日本近世　武家領主　交代寄合　旗本　家臣　在地代官　近世領主制

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年、武家社会に関する研究分野では、「大名」の国家編成の問題や社会集団をめぐる研究が進展し、江戸時代の武家領主に関する基礎概念の見直しも要請されているが、本研究が素材とする「交代寄合」、あるいは「旗本」については、鈴木寿『近世知行制の研究』（日本学術振興会、1971 年）、西田真樹「『交代寄合』考」（『宇都宮大学教育学部研究紀要』第 36 号、1986 年）、藤井譲治『江戸時代の官僚制』（青木書店、1999 年）を到達点として、21 世紀に入ってから大きな研究の進展をみていない。武家領主概念の再検討が、「大名」を素材とした研究によってのみ進むことは、世界からも注目される「武士」の存在の研究成果発信において問題があり、「交代寄合」「旗本」の研究を進める必要がある。

一般的に近世日本における武家領主概念については、石高１万石以上が「大名」、１万石未満が「旗本」として大別されている。さらに両者を区別する指標としては、「大名」は国元の領地と江戸とを参勤交代するが、「旗本」は江戸定住を原則とする、などがある。この二つの基礎的な武家領主概念に対して、石高は１万石未満で「旗本」であるものの、「大名」と同じく参勤交代をするという存在が「交代寄合」とされ、従来の研究史では、大名でもなく旗本でもない武家とされる。幕末期の段階では 33 家あり、その身分と家格については前掲の西田「『交代寄合』考」によって検討が進んだものの、時代ごとにその家数に変動があり、その成立過程、存立構造については未解明な部分が多い。

大名でも旗本でもないとされる「交代寄合」の基礎的事実の積み上げは、近世日本の武家領主概念の見直しを図る上で有効な手立てとなるはずであり、本研究課題に取り組む意義がある。

２．研究の目的

本研究の目的は、江戸幕府の軍事・行政実務を旗本とともに担っていた交代寄合という武家を素材に、とくに武家領主概念の再検討と、近世日本の統治体制の固有性（近世領主制の特質）の究明に留意して、その具体相を解明するものである。その際、領主制と官僚制双方に留意して検討する。通常、両原理は相反する概念であるが、近世日本においては、「武士」が統治階層として存在し、武家領主でありながら、組織の役人としての勤めも果たした結果、両原理が併存していた。これは「大名」「旗本」「交代寄合」いずれの武家領主にも共通するが、それがどのようなかたちで併存しているかは検討を要する。そのあり方を検討することにより、近世領主制の特質の解明につながると考える。

そこで本研究では、陸奥国岩瀬郡（福島県須賀川市）に陣屋をもつ交代寄合溝口家（5000 石）と、美濃国不破郡（岐阜県垂井町）に陣屋をもつ交代寄合竹中家（6000 石）を具体的な対象として、以下の点を具体的課題に設定して研究を進めることとした。

（1）江戸幕府における交代寄合の家格の成立と展開

交代寄合の出自の典型とされるのは、大名分家と中世以来の由緒をもつ家とがあり、新発田藩の分家として成立した溝口家と、豊臣秀吉の軍師竹中半兵衛の子孫である竹中家とを取り上げることで、両者の性格を比較検討できる。

（2）江戸幕府における交代寄合の職務・役割

交代寄合は、近世日本の統治体制のなかで特定の任務があるゆえに在地に住居せざるをえなかったとされる。溝口家、竹中家の両陣屋がある地域は、いずれも交通の要衝であり、その妥当性を検証する

（3）領地支配のあり方（家臣団の規模と支配機構）

交代寄合は、近世国家における「役」遂行を果たすため知行地に居住したため、江戸定府の旗本と異なり、領地支配の拠点となる陣屋を構成する役人の性格（初期以来の家臣であるか、村役人層であるか等）について検討する。

３．研究の方法

（1）史料調査

本研究では、具体的課題を追究するため領主側と知行地側の双方の史料を検討し、幕府―領主―領民関係を立体的に描くことによって、近世領主制の特質を解明する。大名研究であれば領主史料のみで検討可能である内容も、旗本・交代寄合研究においては、領主史料の残存状況が悪いことから明らかにできる部分に限りがあり、知行地の村役人や地代官などの史料の活用が不可欠である。したがって、本研究では、現地調査を積極的に行い、地域に遺された未整理文書の整理も重視して取り組んだ。

とくに福島県須賀川市における史料調査は、2022 年度まで所属していた東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門の資料保全活動との共同にて実施した。須賀川市立博物館が収蔵する、交代寄合溝口家（5000 石）の知行所名主、在地代官をつとめた①陸奥国岩瀬郡上松塚村・小針家文書、②陸奥国岩瀬郡堀込村・廣田家文書、③陸奥国岩瀬郡安藤家文書の再整理、全点撮影、目録作成をおこなった。また、旧岩瀬村（現須賀川市）の村史編纂時に作成されていた『岩瀬村史料所在目録』に掲載される旗本三枝家（6500 石）の知行所名主、在地代官をつ

とめた①陸奥国岩瀬郡今泉村木船家文書、②陸奥国岩瀬郡里守屋村矢部家文書の調査を実施し、全点撮影をおこなった。旗本三枝家は、交代寄合溝口家と同時期（元禄地方直し）に陸奥国岩瀬郡の知行所が成立しており、また同程度の石高（経済規模）の大身旗本家であることから、有益な比較対象として進めた。

岐阜県での調査については、新型コロナウィルスの感染拡大の影響により実施を見送り、調査対象を竹中家同様の中世以来の由緒をもつ交代寄合芦野家（栃木県那須町）に変更して進めた。那須歴史探訪館には芦野家家臣の文書群が複数家残されており、芦野家家臣平久江家文書、山田家文書の撮影を進めた。調査地を変更したことから補助事業期間を延長し、2023 年度を最終年度として取り組んだ。

これらの調査は、いずれも研究協力者や大学院生の協力をえて実施した。また、調査は文書撮影のほか、フィールドワークや関連博物館施設の展示見学などをあわせて実施した。

なお、対象地域の変更により、奥州街道沿いの北関東から南東北の地域性を意識できる視点をえたため、茨城県立歴史館（茨城県水戸市）収蔵の交代寄合本堂家、その家臣の横手家文書の全点撮影を、申請者も参画している国立歴史博物館共同研究「番方旗本家に関する総合的研究」と共同にて実施した。

（2）研究分析・公表

調査した文書群について、撮影画像データはすべて調査先の博物館等と共有し、所蔵者から許可を得られたものについては、上廣歴史資料学研究部門ホームページに文書目録を公開した（小針家文書、廣田家文書）。また、調査内容については、須賀川市立博物館と上廣歴史資料学研究部門の共同企画・制作のテーマ展として 2020 年度「古文書からみた須賀川市域の江戸時代・村の暮らし」（2020 年 10 月 3 日～11 月 15 日）、2021 年度「古文書からみた災害と須賀川」（2021 年 7 月 24 日～9 月 5 日）を開催して、即自的かつわかりやすく一般公開し、さらに関連公開講座などにより詳しい発表を行って研究成果の社会還元にも努めた。

また、調査した文書群の中から本研究課題において注目される史料分析を進め、学会での口頭発表、研究論文発表を行った。

４．研究成果

本研究では、調査拠点となる博物館の学芸員、研究協力者との研究会を重ね、研究内容の共有、情報交換を行いながら、研究課題の解明に向けて進めた。

・2020 年 11 月 6 日（於：須賀川市立博物館）
　参加者：管野和恵、宮澤里奈、三野行徳、工藤航平、澤村怜薫、野本禎司
　内　容：「交代寄合研究の射程」（報告者：野本禎司）
・2022 年 8 月 25 日（於：那須歴史探訪館）
　参加者：作間亮哉、三野行徳、野本禎司
　内　容：「近世後期の交代寄合芦野家家臣団」（報告者：野本禎司）
　　「明治維新と交代寄合那須衆」（報告者：三野行徳）
・2023 年 2 月 28 日（於：那須歴史探訪館）
　参加者：作間亮哉、中谷正克、三野行徳、野本禎司
　内　容：「下野国内に一円知行する大身旗本に関する研究」（報告者：中谷正克）
　　「史料などからみる伊達家と芦野」（報告者：作間亮哉）
・2023 年 3 月 9 日（於：那須歴史探訪館）
　参加者：作間亮哉、重藤智彬、堀野周平、澤村怜薫、中谷正克、三野行徳、野本禎司
　内　容：「探訪館の芦野家関連資料について」（報告者：作間亮哉）
　　「調査の概要と家臣の知行と交流」（報告者：野本禎司）
　　「芦野家知行所について」（報告者：中谷正克）
　　「芦野家の明治維新」（報告者:三野行徳）

これらの研究会での討論内容もふまえつつ、学会での研究報告や研究論文発表を行った。主な研究成果については次のとおりである。

まず、『近世領主支配と家臣団』（吉川弘文館、2021 年 2 月）を刊行し、近世国家・社会における旗本家の「近世領主」としての存立条件であり、近世領主制の特質を追究する上で核心的となる研究視角を提示し、本研究課題の方法論的な部分について問題提起した。また、江戸定府を原則とし、主従制的原理よりは官僚制的原理によって編成される旗本家家臣団の再生産の特徴（流動性の高さ）と、それに対応する旗本家の家臣編成原理の特徴などを明らかにした。

つぎに、陸奥国岩瀬郡今泉村木船家文書の分析成果に立脚して、「旧旗本領主の顕彰と地域社会―日露戦争後の動向―」（『開智国際大学教職センター研究年報 2021』、2022 年 2 月）を発表した。旗本三枝家（6500 石）の知行所名主、在地代官をつとめた木船家文書には、明治 39 年（1906）から昭和 6 年（1931）に至るまでの三枝家との年始状のやりとりが残されている。これを手がかかりに分析をすると、江戸時代以来の領主支配秩序が年始状の村の差出人連名者の順序にも反映され、近代以降も三枝家の生活に関わる必要経費を負担するなど、大身旗本領主と旧知行地（とくに木船家）との関係が濃密であり、明治 40 年代には旧領主三枝家宝蔵を建設しようとす

る旧領主顕彰の動きがあることが明らかとなった。近年、大名家研究で提起、検証されている「旧藩社会」のような動向が、大身旗本家ではみられ、近代以降における近世領主制の規定性について検討する必要性がある。

また、交代寄合溝口家、芦野家の調査成果を取り入れ、歴史学研究会近世史部会大会（2022 年 5 月）にて「旗本「御家」・家臣と近世領主制」と題して研究報告をおこない、同会会誌（『歴史学研究』第 1028 号、2022 年 10 月）に研究論文を発表した。これまで論じられてこなかった旗本「御家」について類型化を試み、また「近世領主」の視点から、旗本「御家」と家中との関係について、交代寄合を含めて体系的に論じた。

なお、交代寄合芦野家の家臣団については、国史学会大会近世史部会において「交代寄合芦野家家臣団の再生産と知行形態」と題して研究発表を行った（2024 年 6 月 16 日、國學院大學）。ここでは、芦野家陣屋を構成する家臣団の再生産について、①家臣が養子や婚姻を結ぶ際の地域性、②地方知行で家臣自身が名請けする家中名請地に注目して、近世を通じて検討を行い、江戸定府の旗本と異なり、18 世紀半ばに近世領主としての家臣団が成立してくることを論じた。①では、須賀川地域の郷士層と姻戚関係を結んでおり、家臣の供給地として江戸は重要ではなく、地域の有力者層との関係が重視されることが明らかとなり、今後、在地性の強い交代寄合の家臣団の再生産を考える視座を得ることができた。また、②家中名請地は、「作子」と呼ばれる小作人に耕作させており、近代以降も継続して家臣たちが土地所有をしている。この点も交代寄合の家臣団の性格として興味深い内容であるが、全貌の解明は今後の課題である。

以上、これまで史料は旗本に比して多く存在するものの、あまり検討が進んでこなかった交代寄合に関して、とくに家臣団の存在形態について多くの新しい事実を明らかにすることができた。本研究において調査した文書群のなかには、研究分析が十分に行えていないものも残されている。引き続き研究分析を進め、交代寄合という武家領主概念を明確化することを通じて、近世日本における統治体制の固有性について追究し、近世領主制がもつ近代社会への規定性についても見据えて研究を進めていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 野本禎司	４．巻 1028
２．論文標題 旗本「御家」・家臣と近世領主制	５．発行年 2022年
３．雑誌名 歴史学研究	６．最初と最後の頁 74-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野本禎司	４．巻 417
２．論文標題 新刊案内：渡辺尚志編『相給村落からみた近世社会 続―上総国山辺郡台方村の総合研究』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 地方史研究	６．最初と最後の頁 118-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野本禎司	４．巻 89
２．論文標題 旗本研究の課題と展望―「武蔵国の旗本」展から―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 関東近世史研究	６．最初と最後の頁 87-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野本禎司	４．巻 83
２．論文標題 幕末期の旗本知行所支配における家臣書簡―旗本牧野家の「在役」宛書簡の検討―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 埼玉地方史	６．最初と最後の頁 17-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野本禎司	4．巻 2021
2．論文標題 旧旗本領主の顕彰と地域社会―日露戦争後の動向―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 開智国際大学教職センター研究年報	6．最初と最後の頁 78-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 野本禎司
2．発表標題 旗本「御家」・家臣と近世領主制
3．学会等名 歴史学研究会大会近世史部会
4．発表年 2022年

1．発表者名 野本禎司
2．発表標題 出羽国村山郡における旗本知行の特徴―3000石高力家の領主支配―
3．学会等名 山形県立博物館講座
4．発表年 2023年

1．発表者名 野本禎司
2．発表標題 水とともに生きる百姓と村―堀込村・廣田家文書を中心に―
3．学会等名 須賀川市立博館テーマ展講演会（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 野本禎司
２．発表標題 江戸時代の須賀川－旗本知行地を中心に
３．学会等名 須賀川市立博物館すかがわ歴史講座（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 野本禎司
２．発表標題 旗本研究の課題と展望－「武蔵国の旗本」展から考える－
３．学会等名 関東近世史研究会シンポジウム「旗本研究のこれまでとこれから」
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 野本　禎司	４．発行年 2021年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 392
３．書名 近世旗本領主支配と家臣団	

１．著者名 中村只吾、渡辺尚志編	４．発行年 2020年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 304
３．書名 生きるための地域史－東海地域の動態から	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関